

令和5年度「品川区学力定着度調査」の結果から 明らかになった課題と学力向上に向けた取組

「品川区学力定着度調査」の趣旨

- (1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。
- (2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。
- (3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

1 調査日 令和5年4月13日(木)

2 調査対象 品川区立学校 第2～9学年の全児童・生徒

3 調査内容

教科に関する調査

→ 調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第2・3学年> 国語、算数

<第4～5学年> 国語、社会、算数、理科

<第6学年> 国語、社会、算数、理科、英語

<第7～9学年> 国語、社会、数学、理科、英語

品川区立伊藤学園

令和5年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
 教科名【国語】

1 定着状況についての概要

分類	2年			3年			4年			5年			6年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	83.3	86.2	85.7	79.1	85.6	80.0	74.4	80.1	75.8	73.1	81.1	74.5	71.1	77.2	74.3
活用	60.6	62.4	60.6	57.5	71.3	57.6	58.8	70.3	59.7	54.4	67.4	59.7	52.5	61.7	57.2

2 具体的な課題とその要因

2年

基礎と活用の目標値は上回っているが、問題の内容別に見ると、「話を聞き取る」「説明文を読み取る」「調べたことを発表する」「文章を書く」が目標値を下回っていた。特に「調べたことを発表する」は55.4と一番低かった。聞き手や読み手を意識した文章構成に課題が見られる。正しい文章に触れたり、自分の書いた文章を読み直してよりよくしたりする経験がまだ少ないということが要因として考えられる。

3年

全ての問題で目標値に対して、正答率が上回る結果となった。しかし、「言葉の学習」の「共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解している」という箇所が、正答率64.2と問題の中で一番数値が低かった。文章の順序を考えることが難しかったと考えられる。

4年

全ての問題で目標値を正答率が上回る結果となった。特に漢字を読む問題の正答率が98.4と高くなっている。一方で、文章を書く問題での正答率が61.2と一番低い結果となった。要因として文章を書く問題では、指定された長さで文章を書くことが難しかったと考えられる。

5年

大問ごとの正答率は、全て目標値を上回った。しかし、問題の内容別に見ると、「話し合いの内ようを聞き取る」の記述問題では目標値40.0に対して正答率が35.8、また「言葉の学習」の連用修飾語の問題では目標値40.0に対して正答率が19.4と、目標値よりも低い結果となった。特に「言葉の学習」の問題では、無解答はなかったものの、同一の誤った選択肢の解答率が5割を超える結果となった。言葉どうしの修飾関係の理解が浅く正しく捉えられなかったこと、また(1)が修飾語を選ぶ問題であったのに対し、(2)は被修飾語を選ぶ問題となっており、正対して答えることが難しかったことが要因と考えられる。

6年

全ての問題で目標値を正答率が上回る結果となった。しかし、「漢字を読む」の正答率が94と最も高い数値であったのに対し、「漢字を書く」の正答率が70.7で、目標値との差が少なく、苦手意識が見られた。また、「文章を書く」の正答率が52.5と一番低い結果となった。さらに、「資料を読み取った事実を書く」問題の正答率が目標値を下回っており、課題が見られた。「漢字を書く」に関しては、日ごろからの使用の上で間違いが多くみられるが、直しがあいまいな部分があったことが要因と考えられる。「文章を書く」では、短い文章でも、考えを書きぬくこと、考えを書き表すことに難しさを感じたことが要因と考えられる。「資料を読み取った事実を書く」に関しては、そのような問題を扱う経験が少ないことや、

「文章を書くこと」自体に難しさを感じていることが要因と考えられる。

3 課題解決のための方策（取組指標）

2年

文を書くときには、いくつかの例文や型を提示したり、出来上がった文章を友達同士で読み合ったりすることで、よりよい文章に触れる経験を多くもたせる。そして自分の書いた文章を読み返す習慣を身に付け、自分自身でよりよい文章に仕上げようとする経験を積み重ねさせる。

3年

物語文の教材では5W1Hを意識した指導を行い、表にまとめる活動を行ったり、文章の中の接続語を穴埋めする問題に多く取り組ませたりして、文章構成能力および理解能力を付ける。

4年

授業の中で自分の考えをまとめる活動の際に、文章の型の提示や接続語の確認、自分の考えと理由を分けてまとめさせるなどして、文章構成能力及び理解能力を身に付ける。

5年

文章の記述については、定期テストなどで条件作文を出題し、提示された条件に合わせて必要なことを書く練習を積み重ねる。また、修飾語を含めた言葉の学習については、問題演習を行うだけでなく、自分の言葉で説明することを通して、言葉を正しく活用する力を育てる。

6年

漢字の書き取りの小テストを1週間に1度取り組み、定着を図る。また、文章を書くことに関しては、文章の型を提示して、自分の考えを当てはめながら書き、文章構成能力が身に付くようにする。学年で取り組んでいる生活ノートの日記でも、習った漢字を必ず使うよう指導し、文章を書く活動を中心に、日頃から漢字を正しく使う力を育てる。

4 次年度の数値目標（成果指標）

2年

文章を書く問題を中心に目標値を上回るように指導していく。

3年

全ての内容で目標値を上回るように指導していく。

4年

文章を書く問題を中心に目標値を上回るように指導していく。

5年

全ての問題で校内正答率が目標値および全国平均正答率を上回るように指導していく。

6年

文章を書く問題を中心に全ての内容で目標値を上回るように指導していく。

令和5年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【社会】

1 定着状況についての概要

分類	4年			5年			6年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	69.7	69.8	69.1	61.8	67.2	61.4	67.4	66.1	67.3
活用	62.5	67.8	67.9	45.7	52.7	46.7	57.1	63.5	59.6

2 具体的な課題とその要因

4年

領域別の正答率を見ると、年度の後半に学習した「安全なくらし」「市の様子の移り変わり」においては、全国平均を上回った。年度の前半に学習した「市の様子」「工場の仕事」「買い物調べ」「店で働く人」は、目標値は上回ったものの、全国平均には及ばなかった。そのため、観点別正答率も全国平均を下回っている。各単元が終わり、復習する機会が少なかったため、定着しなかったと考えられる。

5年

領域別の正答率を見ると、どの分野においても、目標値、全国平均を上回った。「主体的に学習に取り組む態度の分野」では、目標値は上回っているが、本校の値が52.7であり、区の値54.5を下回った。児童の疑問から学習問題をつくる活動及び社会的な課題に対して児童自身がどのように社会的な課題にどのように取り組むのかを考えさせる機会を意図的に行うことを学年の教員で統一されていなかったことが要因として考えられる。

6年

領域別の正答率を見ると、活用の分野では、全て全国平均値を上回った。「生かす」学習として、児童自身がどのように社会的な課題にどのように取り組むのかを考えさせる機会を設けたことが要因として考えられる。「日本の水産業」「日本の食糧生産」では、基礎分野において全国平均を下回った。食糧生産に関するグラフの読み取りに課題があると考えられる。これは、グラフの読み取りの経験が不足していることが要因として考えられる。昨年度、全国平均を下回った「日本国土の様子」や「八方位を含めた地図の読み取り」については、地図帳や地図アプリを使った地域の学習を行ったことで上回ることができた。

3 課題解決のための方策（取組指標）

4年

「一つの単元が終わったから次の単元へ」といった考えではなく、反復して学習するために、他教科とも関連性をもち、系統立てて学習する必要がある。今年度、全国平均を0.3%下回った「知識・技能」に重点を置き、振り返りの機会をもちながら定着を図っていく。

5年

今年度、区の平均を下回った「主体的に学習に取り組む態度」に重点を置く。児童の疑問から学習問題をつくる活動を行い、児童自身が調べたいと思える授業づくりを行う。毎回の授業の振り返りでは、調べ学習の進捗を記述させ、学習を調整する力を育む。2学期後半の学習の「工業」「水産業」の学習においては、自由進捗学習を実践し、主体性を育む。

6年

今年度、正答率が低かった食糧生産に重点を置く。3学期の世界とつながる日本の単元の学習において、現在の日本の食糧生産状況のグラフ、分布図を読み取る時間を意図的に設け、定着を目指す。定着した知識を基にして、世界の食糧状況について理解し、国際協力について学ぶ。

4 次年度の数値目標（成果指標）

4年

「知識・技能」分野において、目標値および全国平均値を上回ることを目指す。

5年

「主体的に学習に取り組む態度の分野」において、区平均値を上回る正答率を目指す。

6年

「日本の水産業に関する基礎分野」「日本の食糧生産に関する基礎分野」において、目標値を上回る正答率を目指す。

令和5年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
 教科名【算数】

1 定着状況についての概要

分類	2年			3年			4年			5年			6年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	85.3	88.7	87.5	78.6	82.8	80.3	75.8	82.3	76.0	69.3	75.2	71.2	68.2	73.4	69.9
活用	62.1	64.9	63.0	57.1	58.7	54.3	58.1	67.1	59.5	56.4	66.5	59.3	47.9	54.2	45.5

2 具体的な課題とその要因

2年

「データの活用」の領域が目標値 82.5 のところを下回り、78.8 であった。個数をグラフに表したり、絵のグラフから数を読み取ったりすることに課題が見られた。要因として、グラフに表したり、読み取ったりすることにまだ不慣れであることが考えられる。

3年

「たし算・ひき算」の「加法の結合法則を用いて、考え方に合うように式に括弧をかいている」という箇所が、目標値 55.0 のところ正答率 35.8 と全ての問題の中で一番数値が低かった。答えは理解できているが、工夫して計算することの理解が不十分であったと考えられる。

4年

「大きい数・小数・分数」の「分数の数直線上での表し方」について、目標値 70.0 のところ正答率 69.4 と、全ての問題の中で唯一、正答率が目標値を下回った。数直線の読み方や、分数の大きさの理解が不十分であったと考えられる。

5年

「いろいろな形」の「ひし形の作図ができる」について、目標値 70.0 のところ正答率 43.3 (全国 70.9) と、全ての問題の中で唯一、正答率が目標値を下回った。コンパスの使い方の定着が不十分であったと考えられる。

6年

「多角形と円・合同」の「円周の長さを求める式を理解している」について、目標値 80.0 のところ正答率 74.7 (全国 83.6)、また「円グラフや帯グラフ・平均」の「与えられた情報を読み取り、基準量と割合から求めた比較量を比べ、発言が正しい理由を説明している」については、目標値 30.0 のところ正答率 24.1 (全国 22.7) となり、この2つが目標値を下回った。記述問題を解く習慣や与えられた情報を整理して問題を解く力が不十分だったと考えられる。

3 課題解決のための方策（取組指標）

2年

グラフに関する問題の際には、一つ一つの手順を一緒に確認するなど丁寧に指導し、力を伸ばしていく。またグラフに表したり、グラフから読み取ったりする経験を今後も積み重ね、問題に慣れさせる。

3年

工夫して計算できる問題を授業で取り扱う場合は、括弧を使用すると、どのように解法が変化するのか考えさせる等の具体的な指導を行う。

4年

数直線の「1目盛りの表す数」や、「1を○等分したもののいくつ分」といった分数の定義について、一人一人に説明させる等、意味理解を重視した指導を行う。

5年

コンパスを用いた作図の練習問題を多く取り入れ、作図のポイントの理解の定着を図る。

6年

自分の考えを図やグラフで説明するだけでなく、記述でも答える練習を重ねる。また、問題を読む際に、与えられた情報を整理して問題を解く力を養えるような指導を行う。

4 次年度の数値目標（成果指標）

2年

全ての問題で目標値を上回れるよう、指導していく。

3年

たし算とひき算の全ての問題で目標値を上回るようにする。

4年

全ての問題で目標値を上回るようにする。

5年

全ての問題で目標値を上回るようにする。

6年

全ての問題で目標値を上回るようにする。

令和5年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【理科】

1 定着状況についての概要

分類	4年			5年			6年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	65.9	67.3	68.2	69.1	72.5	71.1	66.4	67.2	67.1
活用	51.3	49.7	48.6	54.4	61.0	55.1	48.9	50.1	47.2

2 具体的な課題とその要因

4年

観点別正答率については「知識・技能」の目標値 66.7 に対し正答率 67.4、「思考・判断・表現」の目標値 55.0 に対し正答率 55.4、「主体的に学習に取り組む態度」の目標値 42.0 に対し正答率 38.1 であった。「主体的に学習に取り組む態度」の学習内容の定着が課題となる。学習した内容が身の周りの事物・現象と関連付けができていないことが要因であると考えられる。「知識・技能」「思考・判断・表現」の力は平均的にあるので、学習意欲に繋げる工夫が必要であると考えられる。

5年

観点別正答率については「知識・技能」の目標値 69.1 に対し正答率 70.2、「思考・判断・表現」の目標値 60.0 に対し正答率 68.4、「主体的に学習に取り組む態度」の目標値 52.5 に対し正答率 63.1 であった。「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」はどれも目標値を上回っているが、「知識・技能」は 1.1 上回っているだけであることが課題である。基礎的な知識と実験の操作方法などを理解し、定着している度合いが他の項目と比べて少ないことが要因と考えられる。

6年

観点別正答率については「知識・技能」の目標値 66.0 に対し正答率 67.7、「思考・判断・表現」の目標値 56.3 に対し正答率 56.4、「主体的に学習に取り組む態度」の目標値 56.0 に対し正答率 64.3 であった。「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」はどれも目標値を上回っているが、「思考・判断・表現」は 0.1 上回っているだけである。観察、実験から得た結果をもとに、その結果からどのようなことがいえるのかを自分の言葉で表現する力の定着度が他の項目に比べて低いことが要因と考えられる。

3 課題解決のための方策（取組指標）

4年

授業で観察、実験（演示実験も含）を多く取り入れ、自然や科学現象と触れる機会を増やすとともに、結果から考察することを繰り返し行っていく。また、身近な事象と結び付けて、調べ学習などを通して、興味・関心を高め、学習意欲を高める。

5年

授業の中で関連する既習の内容も復習しながら、苦手意識の強い内容については小テストなどを活用し、繰り返し学習を行い、学習の定着を図る。また、身近な事象と結び付けて、調べ学習などを通して、興味・関心を高め、学習意欲を高める。

6年

授業で観察、実験（演示実験も含）を多く取り入れ、自然や科学現象と触れる機会を増やすとともに、結果から考察することを繰り返し行っていく。苦手意識の強い「生命・地球」の内容については小テストなどを活用し、繰り返し学習を行い、学習の定着を図る。

4 次年度の数値目標（成果指標）

4年

「基礎」「活用」共に目標値の3%以上を目指して、基礎学力の定着と既習事項を活用する力を伸ばしていく。

5年

「基礎」「活用」共に目標値の3%以上を目指して、基礎学力の定着と既習事項を活用する力を伸ばしていく。

6年

「基礎」「活用」共に目標値の3%以上を目指して、基礎学力の定着と既習事項を活用する力を伸ばしていく。

令和5年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【英語】

1 定着状況についての概要

分類	6年		
	目標値	校内	全国
基礎	76.2	81.1	80.5
活用	79.4	79.5	82.7

2 具体的な課題とその要因

6年

「単語の意味理解（聞く）」の「身近で簡単な語句を聞き、その意味を理解している（食事）」について目標値 65.0 のところ正答率 59.0（全国 68.2）また、「アルファベットの書き（聞く）」の「音声を聞き、活字体の大文字を正しく書いている（K）」について目標値 90.0 のところ正答率 79.5（全国 91.0）だった。「英作文」の「例文を参考にしながら、身近な人について、簡単な語句や基本的な表現を用いて書いている（できること）」については、目標値 80.0 のところ正答率 63.9（全国 80.1）だった。書くことに関して課題があり、要因としては書く経験が不足していると考えられる。聞く内容に関しては、目標値よりも大きく正答している。

3 課題解決のための方策（取組指標）

6年

日ごろの授業で扱うプリントの内容を、児童が考えて書く内容を多くとるようにし、聞くだけでなく書く力も高められるようにする。

4 次年度の数値目標（成果指標）

6年

書く内容で目標値を超えられるようにする。

令和5年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【国語】

1 定着状況についての概要

分類	7年			8年			9年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	60.3	70.2	64.0	66.5	74.1	68.7	65.3	70.9	68.6
活用	52.2	56.3	49.9	51.7	60.4	54.8	57.5	69.7	63.5

2 具体的な課題とその要因

- 7年** 目標値に対して校内平均正答率が下回っているのは「話すこと・聞くこと」であり、5ポイントほど低い。特にインタビューの内容を聞き取る問題について苦手としており、メモの取り方やそこからインタビューの内容を復元する力が足りていないと思われる。
- 8年** 目標値に対して校内平均正答率が下回っているのは、「我が国の言語文化に関する事項」「話すこと・聞くこと」であり、それぞれ目標値よりも1ポイントほど低い。修飾・被修飾の関係や品詞の種類など、7年生のときに習った文法事項の理解が足りていない。また話し合いの内容の聞き取りについては、話題の中心や話の展開を意識して聴くことができていないと考えられる。
- 9年** 目標値に対して校内平均正答率が下回っているのは、「我が国の言語文化に関する事項」であり、目標値に対して3ポイントほど低い。8年生のときに習った用言の活用や敬語の理解の定着に課題があると考えられる。

3 課題解決のための方策（取組指標）

- 7年** 聞き取りをする際に分かりやすくメモを取る方法を確認して行う。また聞き取った内容をもとに、元々の放送文を復元し、班の友達に伝える活動を行う。
- 8年** 修飾・被修飾の関係については、説明文や物語文の文章を読解する中で、主語・述語の関係や補助の関係などを再度確認していく。また品詞については用言の活用や助詞・助動詞を学習する中で、活用しない自立語も含めて問題演習を行い、定着を図っていく。話し合いの聞き取りについては、会話文における起承転結の文章構造を踏まえてメモを取る方法を理解した上で、聞き取りの問題演習を行っていく。
- 9年** 用言の活用や敬語の理解については、入試に向けて文法事項の復習を行っていく中で、定着を図っていく。

4 次年度の数値目標（成果指標）

- 7年** 「漢字を書くこと」について、目標値に対して6ポイント以上上回るようにする。そのために前期課程のうちから漢字検定などを生かして漢字の学習に興味を持たせていく。
- 8年** 「話し合いの内容を聞き取ること」「文法・語句に関する事項」を目標値に対して5ポイント以上上回るようにする。そのために問題演習を通して知識の定着を図っていく。
- 9年** 「漢字を読むこと」について、目標値に対して6ポイント以上上回るようにする。そのために漢字の小テストを定期的に行い、定着を図っていく。

令和5年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【社会】

1 定着状況についての概要

分類	7年			8年			9年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	54.5	58.5	52.3	53.8	54.3	52.8	57.1	57.1	58.3
活用	51.7	59.5	55.7	46.1	54.8	47.4	48.3	48.5	46.5

2 具体的な課題とその要因

- 7年 「鎌倉時代～室町時代」「安土桃山時代～江戸時代」の分野は目標値より高いものの、目標値との差が小さい。中世及び近世の知識の定着度が低いことが要因である。
- 8年 「日本の姿」の分野は目標値を0.1ポイント下回っている。都道府県県庁所在地の位置や名称、日本の領域に関する基礎的な知識・技能の定着が低いことが要因である。
- 9年 領域別正答率に着目すると歴史分野の平均正答率が目標値に対して低くなっている。とくに江戸時代の正答率が低い。江戸時代の政策や改革に関する基礎的・基本的な知識の定着が低いことが要因である。

3 課題解決のための方策（取組指標）

- 7年 歴史の学習を行う際に、既習事項の復習からはじめる。歴史を苦手とする生徒へ支援を行い、定着度の差が生まれないように取り組む。
- 8年 地理の学習において、日本の諸地域の単元の際には、再度都道府県県庁所在地の確認を取り入れる。都立入試の過去問題などに取り組み、既習内容について復習する機会を設ける。
- 9年 それぞれの時代の重要事項を復習させる。とくに江戸時代に関しては、復習に取り組む機会を授業内で設定する。

4 次年度の数値目標（成果指標）

- 7年 目標値から5ポイント高い、校内平均正答率を目標とする。
- 8年 目標値から5ポイント高い、校内平均正答率を目標とする。
- 9年 目標値から3ポイント高い、校内平均正答率を目標とする。

令和5年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【数学】

1 定着状況についての概要

分類	7年			8年			9年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	67.7	73.7	67.5	59.8	70.5	59.5	61.7	67.9	61.8
活用	58.9	66.4	61.0	41.3	52.7	35.9	39.4	46.4	35.6

2 具体的な課題とその要因

7年 問題の内容別正答率では「いろいろなグラフの読みとり」のみ目標値を4.9ポイント下回っている。各代表値の意味や言葉とグラフの対応についての理解が低いとみられる。

8年 問題の内容別正答率では「関数についての意味」と「階級の幅を読み取る」が目標値をそれぞれ5.2ポイント、7.2ポイント下回っている。知識についての理解が低いとみられる。

9年 問題の内容別正答率では「1次関数の式から、そのグラフをかくことができる」が目標値を9.4ポイント下回っている。式とグラフの関連性についての理解が低いとみられる。

3 課題解決のための方策（取組指標）

7年 (1)各代表値を求める活動を通して、その意味や性質について考えさせる。
(2)2つ以上のデータを各グラフに整理する活動の際に、各グラフのよさに着目させる。
(3)グラフをみて2つ以上のデータを評価し説明する活動を増やし、グラフから分かる事実を表現する力を養う。

8年 (1)関数とは何か、本質的な意味を考えさせる。
(2)比例・反比例において表、式、グラフの関連性やそれぞれのよさについて気付かせ理解させる。
(3)「階級の幅」などの用語の確認。また、階級の幅を変えたときの分析の結果を比較させる。

9年 (1)1次関数の表・式・グラフの関連性を理解させ深める。
(2)1次関数における変化の割合について確認し、グラフでの意味について気付かせる。

4 次年度の数値目標（成果指標）

7年 「基礎」「活用」共に目標値の5ポイント以上を目指していく。学び合いの学習を軸として、深く考え抜く時間を多く確保することで、日頃の授業から理解度を高めて、指導していく。

8年 「基礎」「活用」共に目標値の10ポイント上回っているため、継続して10ポイント以上を目指す。そのために、基礎学力の定着と既習事項を活用する力を伸ばしていく。

9年 「基礎」「活用」共に目標値を上回っているが、5ポイント以上上回れるように、習熟度に合わせた指導をしていく。

令和5年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【理科】

1 定着状況についての概要

分類	7年			8年			9年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	69.0	75.3	70.4	60.0	67.1	60.5	53.0	56.4	51.1
活用	50.0	51.4	46.7	45.0	49.7	43.3	43.5	46.1	43.1

2 具体的な課題とその要因

- 7年** 観点別正答率については「知識・技能」の目標値 63.7 に対し正答率 68.6、「思考・判断・表現」の目標値 60.8 に対し正答率 64.9、「主体的に学習に取り組む態度」の目標値 50.7 に対し正答率 52.2 であった。観点別正答率の項目の「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」はどれも目標値を上回っているが、「主体的に学習に取り組む態度」は 1.5 上回っているだけである。身の回りの事物・現象について、疑問をもち、自分自身で解決する習慣を身に付けさせることが課題である。
- 8年** 観点別正答率については「知識・技能」の目標値 58.8 に対し正答率 63.1、「思考・判断・表現」の目標値 51.9 に対し正答率 59.9、「主体的に学習に取り組む態度」の目標値 45.0 に対し正答率 54.9 であった。観点別正答率の項目の「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」はどれも目標値を上回っているが、領域別正答率をみると「生命」領域が目標値を下回っている。観察、実験を通して、必要な知識・技能を身に付けることが課題である。
- 9年** 観点別正答率については「知識・技能」の目標値 57.9 に対し正答率 57.6、「思考・判断・表現」の目標値 41.0 に対し正答率 48.3、「主体的に学習に取り組む態度」の目標値 43.0 に対し正答率 44.6 であった。「知識・技能」の学習内容の定着が課題となる。基礎的な知識と実験の操作方法などを理解し、定着させることが課題である。

3 課題解決のための方策（取組指標）

- 7年** 授業で観察、実験（演示実験も含）を多く取り入れ、自然や科学現象と触れる機会を増やすとともに、結果から考察することを繰り返し行っていく。また、身近な事象と結び付けて、調べ学習などを通して、興味・関心を高め、学習意欲を高める。
- 8年** 授業の中で関連する既習の内容も復習しながら、苦手意識の強い生物分野については小テストなどを活用し、繰り返し学習を行い、学習の定着を図る。また、身近な事象と結び付けて、調べ学習などを通して、興味・関心を高め、学習意欲を高める。
- 9年** 授業の中で関連する既習の内容も復習しながら、苦手意識の強い化学分野については小テストなどを活用し、繰り返し学習を行い、学習の定着を図る。また、身近な事象と結び付けて、調べ学習などを通して、興味・関心を高め、学習意欲を高める。

4 次年度の数値目標（成果指標）

- 7年** 「基礎」は目標値以上、「活用」は目標値の 3% 以上を目標とする。
- 8年** 「基礎」「活用」共に目標値の 5% 以上を目指して、基礎学力の定着と既習事項を活用する力を伸ばしていく。
- 9年** 「基礎」「活用」共に目標値の 5% 以上を目指して、基礎学力の定着と既習事項を活用する力を伸ばしていく。

令和5年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【英語】

1 定着状況についての概要

分類	7年			8年			9年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	78.5	88.3	82.9	54.8	64.3	52.5	57.3	62.7	54.8
活用	78.5	88.5	81.9	40.0	43.3	31.5	39.0	46.1	34.8

2 具体的な課題とその要因

- 7年** 「聞くこと」が他の技能と比べると10ポイントほど低い。特に「日常会話の理解」(聞く)の数値が目標値よりも高い数値ではあるが73.3と8割に満たない理解度であるため、教科書の定型文では理解しているが、会話表現などの応用した表現に慣れていないことが要因と考える。
- 8年** 「聞くこと、読むこと、書くこと」のいずれも目標値を超えているが、「書くこと」に関しては47.9%であり5割を超えていない。その中でも「3文以上の英作文」が38.1%となっている。その要因は短文を書かせる指導が多かったからだと考える。
- 9年** 長文の読み取りにおいて、目標値を0.7しか上回っていない。また、場面に応じて書く英作文においても、目標値を2.0しか上回っていない。8年生の段階では、文法などの基礎的なことを主に取り扱っていたためであると考えられる。

3 課題解決のための方策(取組指標)

- 7年** 「日常会話の理解」(聞く)力を向上させるために、日常会話などが含まれた教科書のDaily Lifeなど様々な会話表現を含む表現を取り入れる必要がある。ESAT-Jのテストを見据えて、場面を判断し、英語を聞いて、理解できるように促し、自分の意見を言えように指導していく。
- 8年** 文法理解と文法演習のみで終わらせず、既習文法を取り入れた3文以上の英文を書かせる機会を増やしていく。意味の繋がりを意識した簡単な日本語で内容を考えさせ、それを英語にしていく。その際に、既習文法も取り入れ、文法の更なる定着も目標とする。
- 9年** 長文の読み取りに関しては、毎日の帯活動においてリーディング活動を取り入れ、長文の解き方を指導する。その際には様々な形の英文を取り入れる。英作文においては、日々の文法指導に加え、文章を書く機会を週に1回程度設ける。その際、英作文の書き方の指導も実施する。

4 次年度の数値目標(成果指標)

- 7年** 「聞くこと」の領域でどの設問にも校内正答率が85%を上回る。更に基礎学力が定着するよう生徒全体の学力の底上げを図る。
- 8年** 「書くこと」の領域を50%以上にする。また、校内平均正答率を60%に引き上げる。
- 9年** 場面に応じて書く英作文においては40%、その他全ての分野において正答率50%以上にする。

